

「知っているようで知らない」印鑑のこと・運のこと

日時：平成28年7月1日（金）

講師：聖徳會 有限会社ミナモト企画 源 真里 氏

聖徳會は正統運命学の学説を重んじ、運命学術の研究・研鑽を深め、常に真摯な姿勢で運命学の研究と実践に努める者が集い、創業以来3代・61年におよぶ実績と伝統を育んできている。

印は、“印字体＝印相”の吉凶と、“捺印＝印を押す行為”との相互作用が、“印を押す人＝印の持ち主”の運命に重大な影響力を与える。

ハンコ王国とまで言われるわが国であるが、残念ながら、“印を押す事”の意味を正確に認識している人は、そう多くはないのが現状である。

そこで今回は、聖徳會 有限会社ミナモト企画の「源 真里」先生をお呼びして、「知っているようで知らない」印鑑のこと・運のことをテーマにご講演頂きました。

“捺印・・・印を押すこと”はその人自身の、“意見や意志の存在を現す”行為であり、責任の所在を明らかにするものである。そして、同時にそれは、権利や義務の発生、消滅を意味する。

印は、誰が何のために使うかが重要であり、個人の生活に必要な印には、明確に、“実印”、“銀行印”、“認め印”の区別がある。印は吉相であることと同時に、吉相の印の効果を十分に引き出し、かつ高めていくためにも、用途に応じて正しく使い分けること・・・印の押し方が大切である。

①運（運勢）・鈍（純情）・根（根気）

運というものはこの世に存在するかどうかは立証できない。しかし、この世に存在しないということもまた立証できない。

人間が成功するためには運・鈍・根が必要である。鈍・根は自分側でコントロールできる。

成功者たちは総じて根気よく努力をするが、それだけではダメで、運も欠かせない要素となっている。運とは一生懸命頑張っている人に対して吹く風である。

②素質（才能）＋行為（努力）＋運＝結果

私たちは、生まれ方は選べないが、生き方は選べる。同様に、私たちは関わる運を選べなくとも、運との関わり方、対処の仕方を選ぶことはできる。

間違わないことが大切なのではなく、間違いはあったとしても、間違いを正すことが大切である。結果につながらない、目的に沿っていないものは努力と呼ばない。

素質自体にはプラスもマイナスはない。行為（努力）と運についてはプラスマイナスがある。

成功者のほとんどは運が良かったと言っている。逆に失敗した人は運が悪かったと言っている。

③個人の印と組織の印、そして印と印影が存在する意味、押印という行為・意味、メクラ判

実印が必要な場面は、社会的な存在であるということを証明するときである。実印登録をして、印鑑証明を取れるようにしておく必要がある。

実印は押す場面が決まっている。普段押すのは認印で、重要性は高いが実印を押すまでではない場合は、銀行印を押すことが多い。印は姓名の相が三次元に形作られたものである。

押印の仕方でも性格、生き方がわかる。印鑑は名前が付けられた後に作るものであり、名前の相の凶相を補うものである。丸の印影の印鑑は人を表しており、四角の印影は法人を表している。

欠けた印鑑を使用してはならない。また、メクラ版とは中を見ずに押すことであり、印鑑を使う作法としては最低である。自分がしたことに責任を持つつもりで押すことが肝要である。

印鑑を統治する者は、会社を統治する。印綬を帯びるとは、印を使う資格と権威・権力を与えられたということである。

以上